

縄文時代のムラ

旧石器時代の人々は、食糧を求めて移動を続けていたようです。人々の住まいの状況はよくわかりませんが、洞穴で暖をとったり、木や枝を組合わせた骨組に覆いをかけた程度の簡単な住まいであったようです。

縄文時代は、温暖な気候になり植物も多く自生するようになったことから、人々は旧石器時代と同じく食物やケモノを求めて移動を続けますが、その行動範囲も狭くてすむようになり、ついには一か所に定住し、ムラを営むようになります。

縄文時代のムラの全容がわかる京都府内での発掘調査例は、縄文時代後期のムラである城陽市森山遺跡もりやまなど数例に限られています。多くの遺跡では縄文集落の一面を調査できた程度です。

縄文時代草創期については、京都府内での発掘調査例はなく、よくわかりません。やや遅れた早期後半段階では、京都市上終町遺跡かみはてちょうで長径 2.8 m の楕円形の住居跡が見つかっています。

縄文時代前期のイエの調査例として、舞鶴市志高遺跡や木津川市



4本の太い柱を使った竪穴式住居跡（薪遺跡）

加茂町例幣遺跡れいへいがありますが、ムラの全容がわかるものはありません。他府県の例では、この時期に大規模なムラが各地で形成されていたようです。

縄文時代中期になると、京都府内でもムラの様子がわかる調査

例があります。京田辺市^{たきぎ}薪遺跡では、一辺約5mを測る隅丸方形の竪穴式住居跡が1基とその南側に20数基の土坑群がありました。この竪穴式住居跡は壁に沿って溝が2条めぐっており、建て替えがあったようです。住居の床面には屋根を支える支柱穴が4か所あり、床面の中央やや北側に、底面に粘土を貼り付け、その上に礫が散乱する状態の炉が設けられていました。また、同じ縄文時代中期のムラとして、長岡京市伊賀寺遺跡があります。伊賀寺遺跡では、中期の竪穴式住居跡9基と後期の竪穴式住居跡10基が見つっています。中期の竪穴式住居跡の中には床の中央に1mを超える炉跡があり、炉の外周には石を方形に組上げた石囲炉^{いしかこいろ}がありました。石囲炉は中部地方で見られるものとそっくりなものでした。

縄文時代後期の竪穴式住居跡の外周部には、人を埋葬した墓穴が見つっています。縄文時代の墓に数体の遺体を合葬する例は知られていますが、伊賀寺遺跡の墓穴からは下顎の数から8体の成人、1体の子供が別の場所で火葬され、その後一括して長さ100～120cm、深さ50cmの穴に再埋葬されていることがわかりました。骨の上には土器が供えられていました。

この墓穴に埋められていた骨は、タテ方向の細かな亀裂があり歪んでいることから、骨が乾燥する以前、おそらく肉が腐りきる前に焼かれていたことがわかりました。

何か特別な事情で火葬されたのかもしれませんが。



(柴 曉彦)

縄文時代の火葬墓（伊賀寺遺跡）